

カール・マルクス生誕200年

倉田 稔

もくじ

はじめに

伝記

ロシア革命のレーニン

議会主義

マルクス主義の妥当領域

労働者論

労働の価値

野蛮の問題（外側からの野蛮・内側からの野蛮）

補論 毛沢東の場合

政治的民度

民族問題

プロレタリア革命はありうるか

アントニオ・ネグリとマイケル・ハートの『帝国』（以文社）から

ジョン・ホロウエイの提言

プレカリアート

日本の問題

大学とマルクス主義

覇権の問題

最後に

はじめに

今年2018年は、カール・マルクスが1818年に生まれて200年経つ。1883年に彼は亡くなり、その後、マルクスの思想は広がった。200年を記念して、マルクス以後のマルクス主義の問題点を簡単にプラグマティックに考察したい。⁽¹⁾

伝記

マルクスの伝記でも、古い教条にとらわれない研究が出てきた。マクレラン『マルクス伝』ミネルヴァ書房 1976年、に続いて、フランシス・ウィーソン『カール・マルクスの生涯』朝日新聞社、ジョナサン・スパーバー『マルクス』上下、白水社、2013年、である。エンゲルス研究についても、トリストラム・ハント『エンゲルス』筑摩書房 2016年が出た。

ロシア革命のレーニン

マルクスは19世紀にほとんど世界で知られなかった。マルクス主義が世界的に急に有名になったのは、レーニン⁽²⁾のロシア革命（1917年）のお陰である。20世紀にはマルクスはキリスト並に有名になった。21世紀にマルクスは忘れられようとしている。

レーニンのこのロシア革命の際の事情は、近年、ドミトリー・ヴォルコゴノフ『レーニンの秘密』上下、(NHK出版 1995年)で描かれ、従来の認識の変更を迫るものである。スターリンの粛清と同じようなレーニンの姿が描かれる。

議会主義

マルクス以後のマルクス主義にとって重大な政治戦術は、武力革命と議会主義革命かの問題である。およそこれまで多くの場合、武力革命が正しいとされた。つまり、ロシア革命、中国革命を始め、実際に社会主義革命が行なわれた多くの国で、そうなのである。その上、議会主義革命が成功した例はほとんどない（ウーゴ・チャペスの場合を除いて）。

コミンテルン（国際共産主義党）は、イギリスのような例外を除いて、武力革命方式を各国に押しつけた。ただしワイマール共和国時代に、ドイツ共産党のテールマン議長は議会主義戦術を採った。第二次大戦以後、ユーロ・コムニズムが登場し、各国共産党の一部は議会を通じる革命を考えた。

マルクスはどうだったか？ 彼は議会主義時代を経験していない。彼は、イギリスやフランスの有産階級選挙、ドイツの三階級選挙を体験しているだけで、普通選挙権の時代の人ではない。だから多分、議会主義者ではなかったのではないか。

伊藤正『鄧小平秘録』文春文庫、下、279ページでは、謝説が紹介され、それによると、「マルクスは晩年、暴力革命を提唱した『共産党宣言』（1848年）の誤りを認め、（議会を通じて権力を握る）民主社会主義に変わった。」とある。本当にそう言えるのだろうか。

戦前に日本の場合は、コミンテルンで武力革命が考えられていたので、恐らく日本の黨員もそう考えていたのではないか。ただし、1928年から衆議院で普通選挙が行われたから、日本のマルクス主義者は、選挙による革命戦を考えたかもしれない。だが実際は選挙で勝とうと思わず、宣伝戦と見ていた（立候補した南氏の例）。コミンテルンは、中国の方が重要で、日本の戦術を具体的に考えなかったのではないか。議会主義を実際は考えていなかったと思える。

その上、大体、社会主義革命が成功したのは、議会がない国であった。

第2次大戦後、ユーロ・コムニズムが出てきたが、それは、崩壊以前の

ソ連・東欧の体制に対比して命名されたもので、1つの特徴は議会主義である。

さて議会主義になった場合、マルクス主義政党が選挙で勝ち続ける可能性はない。かなり続いたのは、ヴェネズエラのウーゴ・チャベスであり、本人は社会主義者だと言っていた。しかしこれは個人の問題であり、彼が亡くなると、チャベス的政治は受け継がれなかった。だから一種偶然でもある。

議会主義で少しの期間、社会主義をかち取った例は、チリのアジェンデ政権の例がある。ただしアジェンデが自ら社会主義者だと言っていたにすぎない。

チェ・ゲバラは武力戦術家である。現在でいえば、インドの南部内陸でインド共産党毛沢東派は武力を用いている。しかし、そうでもしなければ農民は政府に殺されるので仕方ない。そういう地域もある。

マルクス主義の妥当領域

マルクス主義がどの地域で妥当するかが問題である。

マルクス主義のヨーロッパ的性格が指摘できる。例として、『資本論』は、マルクス自身がザスーリッチに手紙で答えているように、西ヨーロッパに妥当する。

ロシアや中国では、革命の直前に、労働者階級は非常に少なかった。それなのに起こされた。労働者階級の多いところでは、ふつうはマルクス主義的革命は起きない。

日本の歴史を見ても、奴隷制はなかった。アメリカ合衆国には封建制はなかった。アジア、アフリカ、ラテン・アメリカの国々でも、奴隷制→封建制→資本主義という発展をする国はほとんどなかった。

また労働者に祖国なし、というマルクスの発言は、ヨーロッパ内部では考えられるかも知れないが、それ以外の国では難しい。

アントニオ・グラムシ (1891~1937) の思想は、古いマルクス主義者たち、

スターリン、トロツキー、毛、を越えて生き残った。西欧共産主義の理論家とだけ見るのは間違い、とホブスボウムは言う⁽³⁾。しかしまだグラムシ思想は先進国のマルクス主義にとどまる。

労働者論

1950年代初期いらい、「工業化した諸国においては労働運動の中枢をなしていた肉体労働者階級が、就業人口における他の部門の労働者に対して相対的に、また時には絶対的にも数をへらした」⁽⁴⁾ ただしグローバリズムにより世界的に雇用関係は拡大した、ヨーロッパ、アメリカ、日本のような先進国では、サラリーマン、ホワイトカラーが登場し、人口比率でも多くなった。労働者、ブルーカラーは少なくなった。

その上、ヨーロッパで、外国労働者の流入により、自国民はよい働き場所へ移る。その上、本国労働者は雇用を奪われるので、外国労働者の流入に反対する。

グローバリズムの下で、労働者は先進国でなく後進国で増える。先進国では第三次産業の勤労者が増える。第一次産業、第2次産業の労働者は減る。グローバリズムが進めばこれは一層進む。

その上、世界は移民の時代に入る。先進国へ後進国から大量の移民が押し寄せる。実際は経済的理由であり、部分的には内戦などの理由であり、いわゆる難民である。

アジアでは労働者は、もともとは、家から村からのはずれ者だった。東洋では労働者は蔑視され、西欧は労働者は立派な階級である。

労働者と社会主義の2つの運動は同一でなかった。共産党と労働者階級とは、違ったものである。プロレタリアートが真に革命的な階級であるというのは無根拠である。⁽⁵⁾

ソ連と同様に中国とヴェトナムでは大衆的な工業化から労働者階級の自立的組織に到達するという事はなかった。⁽⁶⁾

「ブルジョアがプロレタリアを自らの墓掘人として作り出」(『共産党宣言』) さなかった。「ブルジョアの没落とプロレタリアの勝利とが同じように不可避で」(『共産党宣言』) はない。⁽⁷⁾

なお、日本で学術的文章以外では、労働者でなく、勤労者と書くべきだろう。

労働の価値

人間の労働がどれほど価値があるかは、国によって考えが違う。欧米では高く評価される。労働を蔑視する所さえある。これは人間が大切にされている事と比例関係にあるようだ。それに、これは労賃の高い低いにも関係するようだ。これは経済学的考察よりも社会的あるいは宗教的考察が、少し役に立ちそうである。アジアや中国では、人間労働の価値は低い。これは人間の命の値段とも比例している。日本はその中間である。

ヨーロッパでは残業はほとんどないのに、日本では当たり前であり、その上、過労死がある。人間の労働が低く見られているのだらうし、もしかしたら人間そのものが低く見られているのかもしれない。

アジアで、多くの場合、無償労働がされる。目に見えない労働の成果に対価が払われない場合がある。例えば、外国人に自国の言葉を教える時だ。外国人に中国語を教えた中国人がサービスでそうする場合がある。また自動車修理工場が単に技術的援助をした時、等である。具合が悪いところを直しただけでは、中国人のお客に支払いを求められないので、わざわざ部品交換をしてお金を請求せざるをえない。技術的サービスに敬意が払われない。これは商工業国家としては致命的な弱点となる。

韓国では、肉体労働は蔑視される。これは儒教のせいである。そこで多くの人は大学へ入ろうとする。彼らの願いは、財閥系企業への就職である。あるいは公務員である。韓国人は財閥を時には非難するが、心の奥では違い、財閥に雇われたい。

韓国で、労働組合の専従に会社が給料を払う、という常識では考えられないことがある。

サウジ・アラビアでは、男性は肉体労働を嫌う。それを外国人労働者にさせる。イスラーム教のせい、女性には労働をさせないように務める。

中国では、会社が高学歴者を見栄で雇う場合がある。

野蛮の問題

外側からの野蛮

野蛮な環境ではマルクス主義はどう生きるべきだろうか。

1965年、インドネシア共産党がクーデタを行なったとされる。実際は分からない。スカルノ大統領に対して將軍連がクーデタを計画し、それを知った主に共産党員からなる大統領親衛隊が、クーデタ予防のために、將軍連を処刑したという説が1つある。もう1つは、とにかく大統領親衛隊が將軍連たちを殺すというクーデタを始めた、というものである。⁽⁸⁾

この共産党クーデタ説が軍部から流されて、イスラーム教の団体や町のチンピラが、結局共産党員100万人を殺したのである。

当時、インドネシア共産党員は300万人いて、資本主義国最大であった。歴史上最大でもあった。このうち200万人くらいは義理で共産党に参加していたり、思想的にはしっかりしていなかったようだ。

それはともかく、これらの人々を、理由はともかく、鉄ロープで首をしめたり、鉋で頭をうったりして、普通のインドネシア人が彼らを殺してしまったのである。イスラームではないとか、無神論者だとか、クーデタを起こした党の参加者だということだけで、殺すものだろうか。ここではある種の民度の低さというものがある、あるいは野蛮である。

2018年にメキシコのミチエアカ州のオカンボ、アギリア、タレタンの市長候補が射殺された。麻薬マフィア犯罪組織によるもので、ここでは暴力が蔓延している。

こういう状態で、マルクス主義はどう生き残れるのだろうか。

内側からの野蛮

スターリンの行なった野蛮、毛沢東の行った野蛮⁹⁾(大躍進、文化大革命)、ポルポトの野蛮は、どう考えるべきか。

スターリンは個人としても野蛮であったし、彼の社会主義は荒々しかった(アイザック・ドイッチャー)し、彼の政治は野蛮であった。ただし、当時のロシアも政治的民度の点で野蛮だったので、スターリン政治が成り立ったのであろう。

毛沢東は、マルクス主義の核心を、つまり生産手段の所有の変革が肝心だと正しくつかんだ。しかし、彼は民主主義とか自由とかには関心がない。

彼らは、人民大衆が政治過程から阻害された社会主義(ホブスボウム)をつくった。

ポルポトも、とてもマルクス主義とは言えない政治を行っていた。

いかなる思想も、その本来の意図や内容に限定されることをやめる。

野蛮な社会でマルクス主義が勝利すると、そこではまた野蛮な運営がなされる。

民主的な社会が社会主義化するならば、民主的な社会主義が成り立つかもしれないが、そういう例は今までない。

補論 毛沢東の場合

毛沢東は、彼が亡くなってから、その神話が崩れ去って行った。ただし本土の中国内ではまだ神話が残っているようである、というのは毛沢東への批判的書物の発行は禁止されているからである。

毛沢東の本当の姿の暴露は、李志綏(リチ スイ)『毛沢東の私生活』(文言春秋 1997年)、がアメリカで発行されてから、勢いが付いたのではないか。この書は初め台湾で出た。著者は毛沢東の侍医だった。私生活と銘打たれているが、政治問題についても内側が描かれた。これだけ暴いたら、著者に大

変なことが起きるだろうと思っていたら、案の定、日本語版が出てからしばらくして、著者はニューヨークのマンションで変死した。

バランスのとれた伝記、フィリップ・ショート『毛沢東』（白水社）、が現れた。ショートの本は国際的に読まれただろう。深い研究は、銭理群『毛沢東と中国』（青土社）、である。銭によれば、毛沢東の方針に反対した人は結局、彼の生きている時代には、殺された。毛沢東は自分で、マルクス+秦の始皇帝なのだと、思っていた。銭の本は台湾で出版された。

高文謙『周恩来秘録』上下、（文春文庫2010年）が出た。単行本はすでに2007年である。この著者は、中国共産党史研究所の研究員で、こういう中枢にいる人が、秘密に接することが出来るので、暴露できる。これはアメリカで英語でも出た。周恩来は中共ナンバー・2、あるいは3であり、この彼でさえ、毛沢東の奴隷なのだった。

ジョン・バイロン、ロバート・パック『龍のかぎ爪 康生』上下、（岩波現代文庫、2011年、1992年に英語で出た）は、康生の伝記である、毛沢東の最も暗い部署を担当した。こういう悪漢が共産党にいたのか、と思わせる。

ユン・チアン、ジョン・ハリデイ『マオ』上下、（講談社 2005年）は、世界中をめぐる、毛沢東についてのエピソードを集めたものである。学術研究ではないので、あやまりがあるかもしれないが、旧来の常識が破られる、おどろくべきものである。⁽¹⁰⁾

北海閑人『中国がかくす毛沢東の真実』（草思社2005年）が出た。著者はペンネームで、香港の雑誌『争鳴』に2001年から2004年にたびたび掲載した物の翻訳である。

京夫子『毛沢東 最後の女』（中公文庫 1999年）。これは原書が台湾で1990年に出され、膨大なので半分になったものである。著者はペンネームである。

なお、毛沢東は余り本・論文を書かなかった人のようで、例えば、「新民主主義論」は陳毅がゴースト・ライターだった。中国共産党は、党内、党外、外国向けと、文書が3種類ある。

産経新聞取材班『毛沢東秘録』上下, (扶桑社 1999年)。遠藤誉『毛沢東』(新潮社 2015年)が日本で出た。

以上、『毛沢東秘録』, 遠藤著, 以外は, 英語で, あるいは, 中国語で香港や台湾で出たので, 中国本土以外の世界のインテリに, 毛沢東の姿が知られつつある。

政治的民度

ある国で政治的民度が低い場合, そこで革命や武力的民族独立が行われても, その国は政治的民度があがるわけではない, その反対に, 従来の低い民度のままに政治が行われる。だから, 革命や武力的独立よりも, 政治的民度を上げる方が大切ではないかと思える。

革命の英雄が抑圧者になり, 例えば, ルーマニアのチャウシェスク夫妻や, アフリカで民族独立の英雄が独裁者になる場合がある。

民族問題

集団的人間関係においては, 階級問題よりも民族問題が大きな要因になる。中国・韓国の反日の例は, それであり, ただし政治がそれを利用している面も大きい。ドイツは, 比較的, 民族蔑視をしないことになっていて, 難民をよく受け入れるくになっただが, 『最低辺』(岩波書店)に見られるように, 怖ろしいほど民族蔑視をする。この書の例はドイツ人のトルコ人嫌いを挙げている。アメリカの警察官は, よく黒人を射殺する。

ミャンマーで, 国内に100以上の少数民族がおり, 国民がかれらを国民として認めない。ロヒンギャ問題も, これの一環であり, 並の民族問題ではない。このむづかしさは度を超えている。

マルクス主義は民族問題を二次的な問題とみなしてきた。

プロレタリア革命はありうるか

パリ・コミューンがプロレタリア独裁とは思えない。パリの市民が革命を起こしたのだが、労働者だけがおこしたのではない。労働者が少ない。それに労働者といっても職人である。

ロシア革命でも、労働者、農民、兵士が革命に参加したとされる。この3層がソヴィエトを作った。だから労働者だけではない。労働者だけでは革命は出来なかった。中国革命では、農村の革命であった。キューバ革命も初め民族民主革命であって、途中から社会主義へ移行した。南ベトナムの革命も民族独立の農民・市民の革命であった。最終的には、勝利の果実を、北ベトナム労働党が奪ってしまった。

労働者革命というのは、一種の念仏である。

北朝鮮や東欧の社会主義化は、ソ連の押しつけであった。

後進国の社会主義革命は、ロシア、中国でも、それが成り立った後は、ほぼ開発独裁であった。

ある国で、労働者だけの革命はありえないのではないか。労働者的要求は国民的要求にならないし、というのは労働者は国民の一部であるにすぎないからである。

アントニオ・ネグリとマイケル・ハートの『帝国』（以文社）から

ネグリは、非常に香味深い洞察をした。少しだけ紹介する。

ネグリは帝国論を述べる。⁽¹¹⁾ 人々が対決するのは、帝国に対してである、と。それは帝国主義でない、と。経済は主に、産業経済から情報経済へ替っている。労働者の集団はかならずしも剰余価値の直接生産者ではない。例えば、銀行労働者である。ネグリは、情報労働者を重視する。『帝国』で、社会の基礎は、非物質的労働、特に情報化された経済のサービス部門での発展である、と。

革命を国家権力の獲得の観点から考えられない、と。これは次に紹介するホロウエイと似ている。

帝国に対決するのは、あるいは変革の主体は、マルティチュードである（多様な人々、庶民、民衆）。プロレタリアートではないとする。ただし一歩前に出るマルティチュードである。

ネグリは、ここで、従来の、ブルジョア対プロレタリアート、資本家対労働者という対決図式を変え、帝国対マルティチュードに置き換えたのである。これは意味深い。

ただし、帝国が、意味不明な場合がある。それに著者はヨーロッパ人なので、EU当局を見ているのではないか。アメリカ、ロシア、中国は、今でも帝国主義的であり、ネグリの帝国についての考えは甘いのではないか。中国はアフリカを植民地化する勢いであり、一帯一路政策は経済帝国主義そのものである。

ジョン・ホロウエイの提言

ジョン・ホロウエイの提言は大変示唆に富むものである。

彼によればこうだ。『権力を取らずに世界を変える』⁽¹²⁾から、本の一部だけ紹介する。

いままでは、国家を取って世界を変える、だった。改良主義のベルンシュタイン、革命主義のローザ・ルクセンブルグもそうであって、同じだった。権力の獲得によって非権力的関係の社会を作れない（45ページ）。国家を通じて世界を変えられない。

革命とは、分断に抗する運動、物神化に抗する運動、運動の否定に抗する運動だ。コミュニズムの運動は、英雄的なものとは反対のものだ。普通の日常生活を変えること、誰かに率いられることのない社会を作ること。私達すべてが責任を負っている社会を創ることだ。

友情、愛情、仲間の絆、協同自治の関係を織り上げてゆくこと、それがコ

ミュニズム運動の実質だ。革命を目的に対する手段と考えると、闘いがもっている無限の豊かさを権力奪取というたった1つの目標に従属させてしまう。革命によって、むしろ革命以前の継続が保証される結果になる。(412ページ)。

コミニズムは創出されるべき1つの理想で、1つの状態ではない。現実的な運動。現在の状態を止揚する現実的な運動なのだ。そうマルクスは言っているし、そうすべきだ、と。

エリートに率いられた革命は、階級支配を再構築する結果になる。資本制に代わるべき単一の総体が存在しない。労働者階級とは人間集団のことでなく、非和解的対立関係の極のことである。人民は善であるというロマンティックな思い込みを持たない。人民は矛盾した自己分裂した主体だ。「に代わって」行われる運動ではないものをおこなうべきだ。

以上であるが、ホロウエイの思想はアナキズムに少し似ているようではある。

ホロウエイは、ネグリも自分も、自治論共産主義だとしている。

実際はホロウエイ的な道が社会変革では可能性が多いと思える。

プレカリアート

フランスの社会学者たちが言い始めたプレカリアートも有意義な存在である。もとはイタリア語のプレカリオ(=不安定な)から来た、造語である。パートタイマー、アルバイト、フリーター、契約社員、派遣社員など、非正規雇用形態で生活する人々である。失業奢、ニート、ホームレスも含まれる。この存在はグローバル資本主義が進んで、一層展開したのだから、重要である。日本では『週間金曜日』がこの言葉を広めた。そしてプレカリアート組合もある。中国が世界の工場を引き受け、その分、先進国が工業を失なったので、当然プレカリアートが出てくる。構造的なものである。今後はプロレタリアート以上に重要な階層になる。

日本の問題

日本の共産党が言うような、日本で民主連合政府が出来た時、外国からの投資が減り、景気が低迷するが、そういう対策は考えているのだろうか。ちなみに外国からの投資は全体の半分である。ただし、民主連合政府はできないと私は思う。

日本がアメリカから独立した時、中国から軍事力で尖閣列島が奪われる、漁業乱獲がすすむ、韓国で竹島が奪われる（実は、もう奪われている）。北朝鮮の漁業乱獲が進む。そのため、将来問題として、日本の軍事力が独立して存在する必要がある出てくることになるのではないか。好むと好まないは別としてである。

大学とマルクス主義

日本の大学とマルクス主義の問題について。日本は資本主義社会なので、大学でマルクス主義の講座はほとんどない。戦後一時期は少しあった、日本では諸外国に較べて少し多かった。しかし現在ではほとんどない。日本では、非マルクスあるいはマルクス批判の宇野学派があり、少し大学にある。東日本では優勢である。これは学閥の支えによってであり、大学への就職で東京大学が優位なので、東大の学閥であった宇野学派が強いのである。正しいからではない。

覇権の問題

21世紀に中国が世界の覇権を握るだろう、と言う人がいたが、中国は覇権を握れないだろう。単にGDPの額ではないのである。20世紀末からの中国の経済成長率をみて、そう言ったのだろう、と考えられる。実際、高い時で10%を越え、そうでなくても6%、7%の経済成長率を実現しているのだから、将来アメリカを追い越すことになる。しかし1、それが続くかどうか分

からない、2、経済成長率の数字が正しくない。李克強首相自身が、中国が発表している経済成長率は正しくない、実際は貨物輸送量の伸びが中国の経済成長率だろうと語っている。この2つの点から見て、事は簡単ではない。その上実際に重要なのは、現在の政治体制、学術レベル、金融制度なのである。中国が現在の一党独裁、三権分立の否定を続けていたら、誰が中国の後をついて行くだろう。学術でもノーベル賞を沢山とるような国でないと、覇権国にはなれないだろうし、中国のエリートの若者がアメリカ留学が一番の理想という現今の状態では、中国の覇権は無理だろう。金融システムがほとんど発展していない中国では、世界経済でもリードできないだろう。そのためアメリカの覇権は続くだろう。なお、覇権国が1つであるとは限らない。

最後に

資本主義は倒れないだろう。ただし、その形を変えるかもしれない。

豊かな消費と社会の富が増大したことで、「労働者階級の個人のために真の改革は連帯と集団的行動によってのみ達成されるという信念が浸食された。」(ホブスボウム)労働運動も低迷した。一方、資本主義的政策もうまくゆかなかった。

グローバルなスーパーエリート対世界の貧民の戦いが、将来の問題になる。これはアメリカのあるセレブの訴えている問題だ。これが実は重要だ。つまり富者はますます富み、貧者がますます増え、そうなると、反乱が起きるのではないかと、という警告である。世界は、独裁国、貧困国、麻薬のマフィア国、戦争状態が、ほとんどである。後進国では大土地所有制が多い。これが貧困の大原因である。農村で貧困が多い。

インターネットでニック・ハノーアーが警告している。彼はアメリカのブルートクラフト(超富豪、政治権力者)である。1980年に上1%が国民所得の8%を、下50%が18%をもっていた。2010年に上1%が20%、下50%が12~13%へととなった。今日の格差が史上最大で、日々悪化している。このまま

であったら、民衆の反乱がやってくる、と彼は警告する。これはまたマルクスの問題だ。この恐れはないわけではない。これは予兆として、数年前、ウォール・ストリート占拠の運動が起きた。

所得・収入格差が増大する。例えば、トマ・ピケッチィの『21世紀の資本』での分析のように、資本主義では経済成長率よりも資本収益率の方が高い。国民の富の増大よりも、資本を持つ者の富の増大の方が大きいわけで、終には貧富の差が増大するわけで、押しとどめられない。そうになると、マルクスのいう問題が将来再び考えられる。そして当然出てくる。

注

- (1) 本稿の一部は、ポスト・マルクス主義研究会、札幌・藤女子大、2018年6月10日、報告「ホブズボウム『いかに世界を変革するか』（作品社 2017年）を読んで」で語った。
200年を記念して、映画「マルクス・エンゲルス」（日本名）、ラウル・バック監督。2017年製作・公開、フランス・ドイツ・ベルギー合作、原題はLe jeune Karl Marx, が作られた。
- (2) C・サービス『レーニン伝』が新しい研究。
- (3) ホブズボウム『いかに世界を変革するか』411ページ。
- (4) ホブズボウム、45ページ。
- (5) ホブズボウム、521ページ。これはカウツキーや、レーニンも言っている。マルクスは言っていない。
- (6) ホブズボウム、526ページ。
- (7) ホブズボウム。
- (8) 倉沢愛子『9・30 世界を震撼させた日』岩波書店、2014年。
- (9) 石平『中国大虐殺史』ビジネス社 2007年。
- (10) 渡辺理、書評あり、HP小樽社会史国際研究所。
- (11) ネグリ、328ページから。
- (12) 『権力を取らずに世界を変える』同時代社 2009年、原書 2005年